

編 集 後 記

創刊からちょうど1年、ここに学術雑誌「旭川医科大学研究フォーラム」の第2巻第2号(通算3号)をお届けいたします。諸般の事情で刊行が年明けにずれ込んでしまうことを、深くお詫び申し上げます。

本誌にかんしては、学内外からさまざまな御意見やお問い合わせが寄せられてきました。ある医科大学の先生からは、「基礎医学・臨床医学・看護学、それに一般教育の、合わせて4部局がいっしょになって、きちんとしたまとまりのある雑誌が刊行できるとは、奇跡に近い話だ。羨ましい限りだ」、というお褒めの感想を頂戴いたしました。部局や講座・科目の垣根を越え、教官や技官が互いに協力し合って研究・教育活動を推進する。これは本学の誇るべき特色のひとつではないかと思えます。

本号では、この特色を活かして、初めて特集企画を組んでみました。本学は全国に80ある医学部の中で、最も北に位置しています。当然、寒冷地特有の気候に由来する疾患を扱う医療従事者・医学研究者も多く、そのことが、国内外に広くアピールできる本学の特色のひとつともなっています。そこで、「寒圏医学・寒圏看護学の現状と課題」というテーマのもとに、基礎医学・臨床医学・看護学の専門家の方々から、総説と症例報告を寄せていただきました。今回、依頼論文では初めて、名誉教授の先生にも登場していただくことができました。こうして名誉教授から気鋭の大学院生まで、執筆陣の幅もいっそう広がりました。コーディネーター役を務めてくださった内科学第一講座の菊池教授に厚く御礼申し上げます。

今後とも、折に触れてこのような特集企画を推進していく所存です。編集担当者としては、差し当たり、今回は「蚊帳の外」になってしまった一般教育所属教官も含む、4部局教官揃い踏みの特集企画の実現に向けて動き出したいと思えます。検討したい特集テーマには、「性と生殖にかかわる諸問題」「ブレインサイエンス(脳科学)へのさまざまな視角」などがあります。

エッセイは外科学の鮫島名誉教授にお願いしました。先生は医学史にたいへん御造詣が深く、すでに、御多忙の合間をぬってドイツ語からの翻訳書『ヒポクラテス医学』(ヒルシュベルク著、平成10年、北海道医療新聞社刊)や『医学の古典 - ヒポクラテスからコッホまで -』(ズートホフ監修、平成6年、同社刊)を出版され、多くの医療従事者・歴史愛好家を啓発してこられました。「賢者は歴史に学び愚者は経験に学ぶ」という有名な言葉(ドイツ帝国の宰相ビスマルクの演説に由来する)がありますが、この言葉をまつまでもなく、歴史に学ぶことの重要性には計り知れないものがあります。この度のエッセイにおいても、文字通り「医学史の窓から」、貴重な話題を御提供いただきました。

教育関連の依頼稿(報告)では、前号に引き続き「チュートリアル I」の課題シートを掲載したほか、現在の医学科のカリキュラムの目玉のひとつ「早期体験実習」、さらには、物理学教育や第二外国語教育に携わっている教官の声も収録しました。学内外の教育関係者の参考にしていただければ幸甚です。

平成8年にオープンした看護学科からは、早いもので、すでに130名もの卒業生が巣立っています。卒業後の彼らの、多方面で立派に活躍するすがたも紹介することができました。すでに本号で、看護学科第1期卒業生(本学附属病院勤務)の手になる投稿論文を掲載することができましたが、後につづく方々の投稿にも、大いに期待しています。

連載記事「旭川医科大学回顧資料」では、5日間にわたって行われた昭和50年最大のイベント、第1回医大祭を取りあげました。この医大祭の開催は、さまざまな局面で外発的な「創設」から内発的な「創造」への転機を迎えていた当時の本学のすがたを、見事に象徴する出来事であったといえるでしょう。

末尾ながら、原稿の執筆者・査読者の方々、印刷・製本に従事された(株)旭川印刷の方々に、厚く御礼申し上げます。平成13年12月 (K. H.)

編集委員 (五十音順)

片 桐	一 (副学長/委員長)
近 藤	均 (歴史/副委員長)
塩 野	寛 (法医学講座)
新 開	淑 子 (臨床看護学講座)
中 村	正 雄 (化学)
廣 川	博 之 (医療情報部)
松 浦	和 代 (臨床看護学講座)